

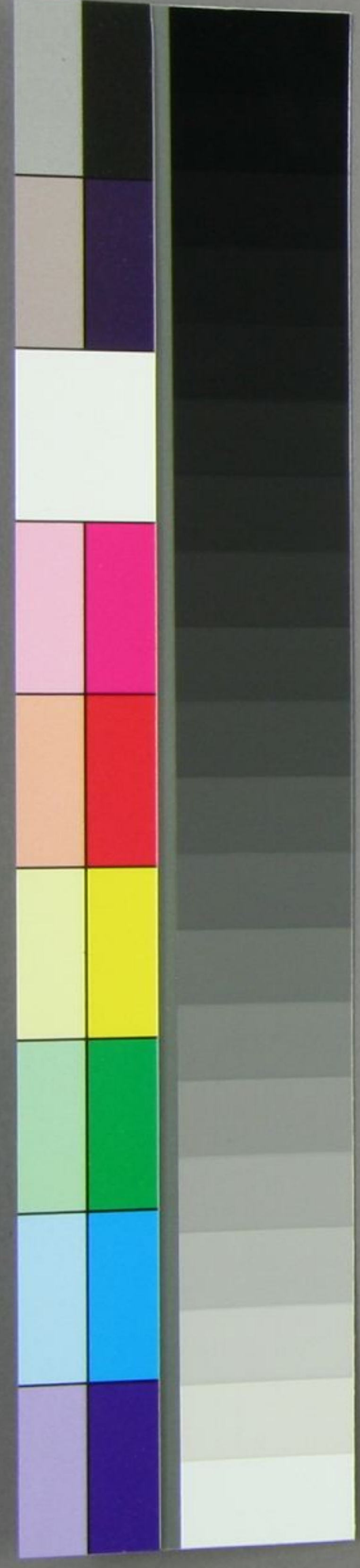
TOYO HOTEL
HARBIN
TEL. 737

No.

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

恭祝 暑中 以 貴 舞 中 上 吉 少 生 は 八 月 初 動 滿
 銘 道 浩 遠 之 秋 意 を 終 々 暫 時 吉 林 に 滞 在 之
 上 去 る 九 日 夜 吟 安 居 に 到 着 仕 々 奉 以 之 閣 下 の 以
 銀 可 状 に 依 り 矢 田 總 領 事 代 理 に 面 會 致 し 在 寓 の 紹 介
 に 依 り 奉 之 將 軍 張 作 霖 と 會 見 仕 々 張 作 霖 と の 會
 見 は 八 月 七 日 の 土 辰 毎 日 新 多 の 支 那 電 報 に も 見 之 の 如
 多 頗 る 興 味 有 る 會 見 に 是 約 一 時 分 胸 襟 を 開 き 之
 詳 論 仕 々 詳 論 の 要 點 は 左 の 如 き 以 之 以 之
 余 閣 下 は 先 に 第 二 七 師 長 と 名 づ 奉 之 に 在 り 今 又 督
 軍 兼 省 長 と 名 づ 奉 之 に 來 る 惟 子 に 支 那 大 官 中
 最 も 日 本 人 に 接 觸 せ 得 者 の 一 人 存 在 べ し 閣 下 の 日 本 人 以 對 す 方

(天津小林文七堂印刷)



大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

忌憚なき批評と要求とを多くを得ば幸なり

張「余の意見と述ぶる前、先づ貴君の満洲に於ける所感を聴かん」

余「大連に上陸以來隨處に日支兩國民が經濟的生活を共にせるを見たるは余の最も愉快に感したる所なり
り假へは本溪湖煤鉄公司の如き、奉天馬車會社の如き又正隆銀行の如き、此等は日支親善の具体化せるものなり」

張「日支親善は余も亦最も熱望する所なり、余は今回の大戦に依り如何あるを國民も正火條件を具備するにあらざれば生存する能はざるを悟れり、正火條件は何ぞ一

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

に重くは武署 上に戦ふ一人是なり 昔は支那は約に
億の人口を有し 戦ふべき人に乏しからず 然れども金及
ひ武署を欠く 然るに貴族は人口割れれども 金及び武署
に乏しなり 故に日支両国民結合すれば 三大條件は自ら
具備すべく 天下の事多く貴族に足らざるなり 然るに
今貴族の對支外交を欠るに 殆んど此事を念とせざる
か多し 或は革命黨を煽動し 或は宗社黨に結ひ或
は馬賊に加はり 徒らに支那を騒亂を大ならしめ 頻りに所
在の支那人を苦しむ 果して日支親善を希望する者と
認め得べきや 貴君大隈侯に好しと聽く 大隈侯の意
見は如何

大正 年 月 日

哈爾濱 東 洋 館

余は革命に大傑侯の知遇を辱ふし、日夕其意見を
離るの機会を有するも、未だ侯が日支親善の外
他意あるを知らず、我々の政治家中、侯の如き其意見を
を代表するに公認の大なるはなく、而して其多量に玉
る迄、發表せられたる支那に、要する意見にあつて、日支親
善の急務を説かざるものなし。余は我々の機微に通
ずるに多少の便宜を有すれども、實に日本政府が直接或
は革命党を助け、或は宗社党に與みしたる事實あるを
心かざるなり。固より日本も民中、個人としては、或は革
命党を助け、或は宗社党に與みしたる者なきにあらざる
べし。然れども此等の日本人も、決して之に依つて、徒に支那を

5
TOYO HOTEL
HARBIN
TEL. 737

No.

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

攪亂し支那の統一を妨げんとするにあらず 或は革命
黨を助け 或は宗社黨に與みする輩が 眞に支那
の進歩を助け 統一を促かす所以なりと信名たれはな
り 現に支那人自身も 其意氣を思ふ誠意は同一不
るべきに拘らず 各々其見る所に依り 或者は革命黨
員となり 或者は宗社黨員となれるにあらずや 日本人
にして 或は革命黨に通じ 或は宗社黨に結ぶ者あるを
見て 直ちに日本人の支那に対する 誠意を疑はるは
過てりと信す

張⁷ 日本人にして 或は革命黨を助け 或は宗社黨に結ぶ者
ある事に疑する 貴君の誤解は諒としたり 然れども 馬賊と

(大正 小林文七 宣房印)

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

なつて支那人を擄奪する者多きは何故ぞ 長春と云ひ
四平街と云ひ 鉄嶺と云ひ 滿鉄附屬地に於ける馬賊の
勢力は恐るべく 然かも日本・警察の之に対する取締は
頗る實大に失するのみならず 時に之を保護するが如きを
觀あるは奇怪なり 鐵道附屬地外に於ける支那人の馬
賊に至ては之を討伐する事容易のみ 然れども鐵道附
屬地内に擄息し 日本人を主領とする馬賊に至ては 支那
官憲の力を以て之を討伐する事能はざるなり 日本は真
に支那の秩序と進歩とに同情を有すと云ふを得べきや
余「日本人にして馬賊なる者多しとは余の初めて聞く所なり
余大連に上陸して以來頻りに馬賊を警戒すべき注意

No. _____

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

を受けたるが 此等の注意者の雑誌に依れば 従来の
被害者は多く日本人なりと如し 馬賊の多数が
日本人に在り 其被害者の多数も亦日本人なりとは其の
理解を難きを多かるが 依りに馬賊中日人ありて
支那人を侮辱すること 雑誌の如きとせば その日本人は
即ち日支親善の敵にして 支那の賊なると共に 又日本
の賊なり 如斯き日本人に對して 日本政府は支那の府
と協力して之を討伐するに躊躇せざるべし 閣下之を奉
て駐在日米領事に對されよし
張「如かり此件に就き余は亦日本領事と懐疑中なり如
れども 貴君と亦亦如し 此事情を大隈首相に

(天津小林文七堂印行)

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

告げ 案の非難は加害者の臆説にあらす 凡そ確実なる
調査に基けるものなる事を併せられよ 殊に最近の長
春に於ける 賭博の多きも 昔に未だ勅令せざるに先ず
鎮撫せられれども 其主謀者か何人なるかは 識者等
之を知る

之と中の 其他吉林省之長 郭宗瀛 吉林省議會
長 劉文田 同議員 楊作舟 前駐蒙總長 翁文灝 吉林
省立圖書館長 孫樹棠等とも 曾見録に於て 孰れも對
外人種競争の立場より日支親善の急務を認むるに拘
らず 日本人の誠意に對しては 張作霖と同様の 歎息を吐
し居りしを

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

No.

中身の調査は、^の實に依れば、長春老少溝の鐵道
 及び第一松花江は、^の鐵道志あるが如き利益を望む之却
 て露兵人を以て日本が露兵の苦戦に乘して利益を
 確保したるが如き、^の無他情を抱かしたる傾向なきに
 あらず、^の長春老少溝の七十一哩の鐵道は、從來支那馬
 車を以て長春に集收したる以上に多く物資を集收する能
 はさるべきも、老少溝は軍事上甚だ重要の地點なるか
 故、^の利益は誘ふに足るものありと存、^の陶然昭は今日船付
 場とお成居り、^の其周圍は悉く沼澤にして大都令を
 建設する能はさるのみならず、^の軍事的防備を施すこと絶
 望のなき、^の知るに老少溝は一帶の丘陵に懸りて前に第二

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

松花江あり 流れを隔て、呼尔滨に連る大平原を控ふるが丘陵に軍事防備を施せば、以て遠く呼尔滨を制するを得べし。加ふるに大都會を建設する餘地は充分に有るに、我々に獲得すべし。鉄道の終点を陶然昭に求め、そりし事は、毫も憂あるに足らず。第一松花江は、吉林陶然昭間のみ一年中、五月流船を過すべし。陶然昭伯都訥間は、水深く、江底は砂地にして、流漂不可なるが故、特に大砲ありし後に、あられば、大船を過じ難く、小舟の意にては、唯支那ジャンクを用ひて、流域の穀物を集収する外、あかるべく、大砲に於て、有難きにあらず。小舟は、如新を利権よりも、寧ろ次の如き、特利を得る方が、吾人の生

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

情を横はず 利益は却て大なるものなかりしかと存

一 長春哈爾濱間の鐵道所有權は之を露國に屬せしむ

るも 其線路を五呎及び四呎ハ吋の二種となし 南滿鐵

道の北上列車を長春に止めず 遠く哈爾濱に直通

せしむる事 露國は歐前ワルソ才取きて
外西列車の乘客するを許し居

二 長春哈爾濱間に邦語電報取扱を擴張する事

三 松花江本支流の水を引ききて 吉林省に農業用水を給

むの自由を認めしむる事 吉林省ハ北海道ヨリも耕作地
多きは農業者の認むる事

世上傳ふ事に依れば日露協約附帶事項に属する裁判

は行儀み居る申す方若し事實ありとせば 右の三ヶ條は

一考を要す

12
 TOYO HOTEL
 HARBIN
 TEL. 737

大正 年 月 日 哈爾濱 東 洋 館

No. 少年は一雨の中 吟 亦 實 在 疑 し 船 以 て 松 花 江 及 黑 龍 江
 を 下 航 し ハバロウ スク に 赴 き 露 語 漢 語 海 外 行 政 を 研 究
 仕 り 鉄 路 浦 塩 に 出 て 久 山 京 城 を 至 て 九 月 初 再 び
 東 京 に て お 静 の 繁 を 得 友 存 存 存 張 著 者 齋 藤 君
 等 等 下 並 江 洲 家 族 活 動 録 之 以 建 在 在 奉 新 小
 野 貞 夫

八月十日 吟 亦 實 在 疑

柳 杏 郎

大隈 侯爵閣下